



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | 1989年東独革命についての一考察 : 党員革命と民主的<br>社会主義党の成立  |
| Author(s)    | 大笹, みどり   |
| Citation     | 国際公共政策研究. 1999, 3(2), p. 193-212  |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/6091">https://hdl.handle.net/11094/6091</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1989年東独革命についての一考察  
— 党員革命と民主的社會主義党の成立 —

A Study of the East German Revolution in 1989  
— The Revolution by Party Members  
and  
the Establishment of the Party of Democratic Socialism —

大笹 みどり\*

Midori OSASA\*

Abstract

This paper examines the process of transformation of SED (Socialistic United Party of Germany), former dictatorial political party of GDR (East Germany), into PDS (Party of Democratic Socialism). The turning point of the party was just for some weeks at the end of 1989 when party members won the fight against old leadership. That could be called the inner party revolution, which has been often overlooked from today's point of view. To clarify true character of PDS, the party is analyzed in regard to its history, especially its turning point in 1989 as well as change of leading members of the party. To examine this point also contributes to find the reason of the lack of "inner unification" in united Germany.

キーワード：東独革命、ドイツ民主共和国、社会主義統一党、民主的社會主義党、党員革命

Keywords : East German revolution, GDR, SED, PDS, revolution of the party members

---

\* 大阪大学大学院国際公共政策研究科 博士後期課程

## 1 はじめに

周知のようにドイツでは1998年9月27日、統一後第3回目の連邦議会選挙が実施された。旧東独（DDR）支配政党SED（社会主義統一党）から生まれたPDS（民主的社会主义党）は6議席増やし36議席を獲得、また連邦全域での平均得票率が5%を越えたため、念願の議員団としての資格をもって連邦議会の一部を占めることになった。PDSは統一直後の1990年12月に行われた連邦議会選挙から着実に支持を延ばしてきたが、その得票の配分を見ると旧西独地域では1%前後と一貫して低いのに対して、旧東独地域では今回20%を越えており、同党の議席が相変わらず東のみの支持に基づいていることがわかる<sup>1)</sup>。

確かに、同党は統一以来8年を経た現在も旧西独地域で効果的な展開を果たしていない。また、先の与党CDU/CSU（キリスト教民主・社会同盟）からは、とりわけ選挙前になるとレッド・ソックス・キャンペーン<sup>2)</sup>といったあからさまな攻撃を受けてきた。民主主義国を自認する一国内で、正規の手続きをふまえて議会へ進出した政党に対してこのような攻撃が公然と繰り返され、またそれが通用すること自体が不思議であるが、結局のところPDSはSEDという独裁政党が名前を変えただけの「後継政党」、「共産主義者」であるという評価が統一以来変わっていないということに原因があるようである。

冷戦下においては西独と東独は東西の最前線であり、東は西を「資本主義、ファシストの国」と呼び、西は東を「共産主義者」「独裁国家」と見なし両国は対峙していた。しかしこれは少なくとも東独では政府レベルの話であり、一般市民は西のテレビ番組を見ながら常に憧れをもって自国と比較していたという。彼らの興味は他のいかなる東欧の国でもなく西独、

1) ドイツでは得票率5%に満たない政党には議席が配分されない。しかし小選挙区で3議席獲得すれば、得票率5%以下の場合でも議席配分されるという特例がある。PDSは1994年選挙では後者の方法で連邦議会に議席を確保した。1990年選挙は統一後まもないということもあり、東西別々に得票の集計が行われたためPDS得票率は11.1%ということで議席配分された。しかし、いずれも特例での議席獲得だったため、PDSには議員団ではなく「グループ」という資格しか与えられず、政党補助金配分、発言権などの面で不利な立場にあった。PDSの連邦議会での得票率、獲得議席数の推移は以下のとおり。

(%)

|      | 旧東独地域 | 旧西独地域 | 全ドイツ | 獲得議席数 |
|------|-------|-------|------|-------|
| 1990 | 11.1  | 0.3   | 2.4  | 17    |
| 1994 | 19.8  | 1.0   | 4.4  | 30    |
| 1998 | 21.6  | 1.2   | 5.1  | 36    |

Zeit Punkte. Entscheidung '98. Fakten, Analysen, Ansichten zur Bundestagswahl, S.42.

および Frankfurter Allgemeine Zeitung, 30. September 1998, S.7 より作成。

2) "Rote-Socken-Kampagne". CDU/CSU にとってPDSはSEDという共産党と同じで、従って「赤」である。とりわけ選挙運動と絡ませてPDSの「急進性」や「危険性」を訴える講演会などを各地で行なう。

連邦共和国に向けられていたのである。それゆえ、統一は東の市民の統一への明確な意志表示の下に実現した。しかし常に西独に注意を向けながら統一への意志表示をした東の市民と比べて、西の市民は統一を政府の政策として冷静に受け止めたただけだった。

振り返ってみれば、すでに統一時点、あるいはそれ以前から東西ドイツ人の中には齟齬があったわけだが、統一後発覚した「心の壁」の存在や「内的統一」の欠如の原因はもっぱら東の人々の態度にあるとされた。最近になって、その原因を東の人々が革命に向けて決起した力の源に目を向けようとする西独人、彼らの東独人に対する無理解、感情移入能力の欠如にありとする新しい見解もみられるようになったが、これをもって国内一般の意見が変化したと判断することはできない<sup>3)</sup>。

血を流すことなく遂行された「平和革命」については、10年を経た現在もしばしば言及されている。これは1989年秋の東独革命が、統一ドイツの原点と見なされている所以であろう。その革命の結果、SED体制は崩壊したが、これはDDR市民自らが勝ち取った歴史的成果である。ところが「DDR市民」にはSED黨員も含まれていた、という事実を目に向けられることはこれまでほとんど無かった。PDSがSEDから生まれたことは否定しようもないが、PDSは一般市民とともに平和革命を担ったSED黨員の中から生まれた、と説明した場合、同党についてSEDが名前を変えただけの「後継政党」であるとは簡単に断定できないはずである。

SEDは230万人(1989年)の黨員を擁する巨大組織であった。当時、DDRでは成人の6人に1人、就業者の5人に1人がSED黨員であり、党内の社会構成と一般市民のそれが類似しており、また全黨員中、数千人の行政官僚の他、政治エリートと呼ばれるのは500名ほどであった<sup>4)</sup>。さらに、党および国家の重要事項に決定を下す、いわゆる指導部のメンバーは30名に満たなかったということからしても、指導部黨員と一般黨員の距離は政府と一般市民の距離に等しかったといえる。

従って、この巨大組織のだれが、どのようにPDSの基礎を築いたのかという部分を明らかにしないままPDSをSEDと同一視し批判の対象とすることは、東の本質に目を向けることなく「心の壁」の原因を東にありとしてきた西の姿勢の延長と解せなくも無い。PDSがSEDから生まれたという「継続性」の局面だけでなく、「断絶性」の局面が探られて始めてPDSという党に対しての判定が許されるのではないか。そしてそのためには、PDSが統一以来今日まで、連邦議会の一角を占めてきたという事実を重く受け止め、同党の原点を振り返ることがPDSとその支持者について理解するためにも是非必要なことである。

3) Lothar Probst, Ost-West-Differenzen und das republikanische Defizit der deutschen Einheit, in: *Aus Politik und Zeitgeschichte* B41-42/98 vom 2. Oktober 1998, S.3-8.

4) Vgl. Gerd Meyer, *Die DDR-Machtelite in der Ära Honecker*, Tübingen 1991, S.54 und S.126f.

PDSについては、これまでいくつかのまとまった研究成果があるが、書かれた時期によって捉え方が異なる。フラウデ、ヴェルツェル、ゲルナーはSEDとPDSの断絶性についての考慮はしない。ノイゲバウアーとシュテースの関心は現状にあり、継続性、断絶性ともに大きな問題ではない。継続説という点ではモローの研究が挙げられる。また党員の協力の下に、彼らの証言や貴重な資料に基づいてSEDからPDSへの流れを跡付けたポルトフェルトの研究はPDSの「正史」という性格を有するが、市民革命の影に隠れがちな党員革命を集中して取り扱っている訳ではない<sup>5)</sup>。

本稿は、PDSがなぜ旧東独地域で支持されるのか、という問いを念頭に置きながら、PDS設立から10年を経た現在の視点から、SEDがPDSへ転換する過程を見直し、SEDとPDSの「継続性」と「断絶性」の問題に集中的に取り組む。その際、組織的および人的転換の部分に焦点を絞る。また、組織原理には触れるが、世界観については今後の課題として見送りたい。以下においては、第2章で党員革命の前史、第3章では東独革命の一部としての党員革命、そして第4章で指導層の分析を行う。考察の対象については1989年秋の東独革命期から1990年2月PDS第1回大会までの時期に限定する。これは、この党大会を境に「解党」をめぐる議論が行われなくなり、党員の減少傾向が幾分緩和し、指導部の目まぐるしい交代に終止符が打たれたことによって、党自身の「転換期」がひとまず終結を見、PDSという党の輪郭が大方完成したと考えられるためである。

## 2 党の不安定要因—党内反対派、改革派の存在

DDRでは血を流さない平和的革命的結果、SED体制が崩壊し市民は自由を勝ち取った。国家を支配の道具と化していた党の強大な権力構造を揺るがした要因の一つは、国内の諸矛盾が拡大したことである。DDRは対外的には開放性を強調していたが、国内では反対派が弾圧され、旅行の自由さえ認められなかった。また、社会主義の現実から目を逸らし時代に逆行する路線は市民の不満を益々募らせ、遂には革命に駆り立てたのであった。

DDRで普通、「党が」といった場合、事実上「指導部が」、あるいは指導部とその決定を執行する官僚機構という意味であることが多かった。それは、SEDではヒエラルヒーの頂点に立つ書記長を含めた21名の政治局員と5名の政治局員候補で形成される指導部に権力や

5) Andreas Fraude, "Reformsocialismus" statt "Realsozialismus"? Von der SED zur PDS, Hamburg 1993. Christian Welzel, *Von der SED zur PDS. Eine doktrinegebundene Staatspartei auf dem Weg zu einer politischen Partei im Konkurrenzsystem?*, Frankfurt/M. 1992. Manfred Gerner, *Partei ohne Zukunft? Von der SED zu PDS*, München 1994. Gero Neugebauer/Richard Stöss, *Die PDS. Geschichte. Organisation. Wähler. Konkurrenten*. Opladen 1996. Patrick Moreau, PDS, Anatomie einer postkommunistischen Partei, Bonn 1992. Heinrich Bortfeldt, *Von der SED zur PDS*, Bonn 1992. Ders., *Von der SED zur PDS-Aufbruch zu neuen Ufern?* Sommer/Herbst 1989-18. März 1990, in: *Controvers. Diskussionsangebot der PDS*. Hrsg. von der Kommission Politische Bildung des Parteivorstandes der PDS, Berlin 1990.

特権が集中しており、すべての重要な決定がここで下されていたためである。

巨大な党の底辺はごく一般の市民であり、DDR社会主義の現実に最も近いのも彼らであった。例えば、労働者は一般労働者であっても党員であっても資材の欠乏やノルマ達成のために苦しんだ。つまり、指導部の硬直した姿勢は同時に党員をも路上に駆り立てる要因でもあったのである。SEDは表向きには「一枚岩」化された党であったかもしれないが、実は強硬措置によってその表面化を抑えてきたものの、常に批判的分子ないし不満分子を抱えており、それが党の不安定要因として拡大していった。東独市民革命の一局面である党員の革命はその帰結であったといえる。

SED内には革命に至るまで反対派の一脈が認められ、この流れは「民主的社会主義」の言説の歴史として大きく3世代に分類される<sup>6)</sup>。まず、「第3の道」世代と呼ばれる第1世代の言説はDDRの「社会主義への独自の道」をめぐって展開された。スターリンの死後、スターリンへの個人崇拜、教条主義といったスターリニズムの克服と「社会主義的理想」にかなった民主的政治の構築という、いわゆる「新路線」が問題となった。しかし、1953年6月17日をもってこの議論は終わる。労働者蜂起は武力をもって制され、ウルブルヒトの統投は新しい路線を完全に拒否することを意味した。政治局員で国家保安大臣であったツァイサーや政治局候補でSED機関紙『ノイエス・ドイチュラント』編集長のヘルンシュタット、同じく政治局候補アッカーマンを始めとした中・高級幹部やレオンハルト、ハーヴェマン、ハイムなどがこの世代である<sup>7)</sup>。

第2世代は「建設世代」と呼ばれる。第1世代の改革の失敗を批判的に捉え「社会主義への独自の道」ではなく、理想にかなった実践という変革が唱えられる。壁建設後、50年代に教育を受けた若い知識人（経済指導者、ジャーナリスト、政治家、芸術家）らが共同で社会の変革を試みた。そこでは専門知識に基づく批判と近代科学によるDDRの窮乏からの克服が目指されたのである。この世代は西ドイツの能力主義社会を一つの可能性として視野に入

6) Rainer Land, Reformbewegungen in der SED in den 80er Jahren. Möglichkeit und Grenzen, in: *Zwischen Verweigerung und Opposition. Politische Protest in der DDR 1970-1989*, Hrsg. von Detlef Pollack, Dieter Rink, Frankfurt/New York 1997, S.129-144. 党内反対派についてはこの他 Thomas Klein/Wilfriede Otto/Peter Grieder, *Visionen. Repression und Opposition in der DDR (1949-1989)*, Frankfurt/O. 1996. *Gesellschaftsanalyse und Politische Bildung e.V.* (Hrsg.), *Zur Programmatik der Partei des Demokratischen Sozialismus. Ein Kommentar*, Berlin 1997. など取り上げられている。ここでは世代ごとに分類したラントの分析を用いる。

7) レオンハルトはソ連で育ちソ連で教育をうけ、優秀なスターリニズムの活動家として育てられたが、母国ドイツでの社会主義建設途中にスターリニズムと決別し、ユーゴへ渡る。文筆活動の中でDDRスターリニズムの実態を暴露し批判した。ハーヴェマンは物理学者であるが、戦前よりKPDに近く、ナチス時代は反ファシズム抵抗運動に参加したため逮捕後、死刑宣告を受けるが収容所生活を生き延び、SEDに入党するが一貫して民主的社会主義を訴えて党除名、自宅監禁の後死亡。1989年11月28日に名誉回復される。この世代であるシルデヴァンやヤンカは1990年初頭PDS仲裁委員会によって名誉回復され、PDS党幹部会の長老委員会のメンバーとなった。反体制派作家でDDRでの本の出版を禁止されたハイムは1994年にPDSから連邦議会選挙に立候補、当選しPDS議員となった。

8) 「経済政策と社会政策の統一」方針。後進的社会主義政策をカモフラージュする政策で、表面的には西の福祉国家に倣うというものであったため、社会主義の対案が意味を成さなくなった。

れていたが、教条主義勢力による妨害や、党が1971年6月に新方針を打ち出したために<sup>9)</sup>言説の展開に終止符が打たれた。この世代は以後、沈黙することを運命付けられる。作家のクリスタ・ヴォルフなどがこの世代である。

第3世代は「改革社会主義者」と呼ばれ、言説は70年代後半に始まる。この世代の多くはDDRで育った知識人の家庭の出身者で、両親よりもより徹底したより良い教育を受けた世代である。DDRが比較的安定した時期に学生時代を過ごし、権力体制を現実として捉えていた。しかしこの世代が経験したものは70年代初頭の国連加盟に始まる外交の展開と国内の非開放性の矛盾、経済・社会政策の成功のプロパガンダと現実の矛盾であった。指導部の硬直性は第3世代に実状を変化させることの不可能性を認識させたが、その結果、この世代は意識的に政治や実践から距離を置くようになり、活動の場を大学や学術機関、研究所へ求めていったのである。80年代後半には、研究プロジェクトや国営の研究所、研究会といった公式の機会を利用して穏やかに組織された幾つかのグループが党内に成立していた。SED体制崩壊後はこの世代の一部は緑の党やSPDに合流したが、大部分はPDSへの転換に指導的役割を果たす役割を引き受けたのである。

それでは、様々な矛盾に直面してもなお党員を党に留まらせたのは何だったのか。この問いに対して、単に権力から得る有益性という合理的な理由だけではなく、「より良い社会」という「オプション」が常に存在していたためであるという回答がある。社会主義の現実がいかに矛盾を孕んだものであろうとも、その「オプション」は再生産されていったのであり、またその「オプション」の存在を前提とした「改革をめぐる言説」があったからこそ、党員の党への結合が保たれたのだという。しかし、たとえ「改革をめぐる言説」が党員を党と結合させ、多かれ少なかれ党の安定に寄与したとしても、それが反対派という性格を有する限り、長期的にそして本質的に党の不安定要因となったことは否めない。

もっとも、この言説が行動の最たる形である革命に転化することは、その行動主体があつて初めて可能になる。SEDの場合、1989年のいわゆる党内革命の行動主体は下部、すなわち基幹<sup>カダー</sup>党員<sup>9)</sup>である下級幹部党員や一般党員であった。DDR建国以来、SEDは体制を支えるべき次世代を「マルクス主義的」教育によって育成していったが、その結果、「党の忠実な支持者」と共に、党の不安定要因となる可能性を有する新しい世代が党自身によって再生産されていたのである。社会主義の理想を学んだ一般市民や党員は、その正反対の社会主義の現実をDDRの日常で経験した<sup>10)</sup>。生活の場や職場での抑圧や欠乏の現状は、社会的平等や

9) カダー (Kader) とは「特定の地位にあつて、特定の役割を果たす」党員、つまり上からの命令を実行し、いかなるレベルのいかなる部門にせよ、その許された権限内での決定を下すことができる党員。Vgl. Gero Neugebauer, Die führende Rolle der SED, Prinzipien, Strukturen und Mechanismen der Machtausübung in Staat und Gesellschaft, in: *Die SED in Geschichte und Gegenwart*, Hrsg. von Ilse Spittmann, Köln 1987, S. 69-73.

10) H. ヴェーバー、前掲、84ページ。

自由、解放といった概念とは相容れないものであり、こうした理論と実践の矛盾が党内外の反対派を再生産していったのである。

但し、党内の不安定要因についてはすべてが歴史となった今、証言や当時の資料から知り得ることであって、当事者以外の一般党員がそのような事実を知る事は、少なくとも80年代後半に至るまではほとんど不可能であったといえる。

### 3 1989年秋の東独革命と党内2段階革命

#### 上からの崩壊

1989年秋の党内革命は2段階の経過を辿った。第1段階の革命とはクレンツを代表とした指導部内の比較的若い世代によるホーネッカー解任劇である。人事の入れ替えが皆無といてよく、高齢化していた指導部<sup>11)</sup>は諸問題に対して時宜を得た対応が出来なくなっていた。とりわけ80年代には、生活の質についての観念が大きく変化し、サービス、旅行の自由や社会の開放性など、価値観の変化が顕著であったが指導部はこれに対応しきれなかった。80年代後半になると、党は国際動向や改革路線を歩み始めたソ連の圧力、国民の流出など党外からの圧力に晒されていたため、下部の不満の高まりは指導部の若手に危機感とともに受け止められた。政治局員であるクレンツ、シャボフスキ、ロレンツ、ヘルガーらは、ソ連の合意を取り付けた上でホーネッカー解任を企て、他の政治局員への根回しを行った。ホーネッカーはこの頃健康状態がすぐれず、不在であることが多かったということもあり、計画は容易に進み、10月17日の政治局会議でホーネッカー解任の動議は過半数を得た。その結果、ホーネッカーは翌日の中央委員会総会上で、健康状態の悪化を理由に辞任への意志を表明することになったのである。クレンツらはソ連に倣った改革路線を可能にし、党を安定させるためにこのホーネッカー更迭を企てたわけである。しかし、スターリン型の指導体制<sup>12)</sup>を採っていた党が、ホーネッカーという強力な指導者を失ったことは党にとって致命的な打撃であり、この時点でSED体制は上から崩壊し始めたといつてよいだろう。

11) 1989年9月時点の21人の正政治局員の平均年齢は67.2歳で、政治局員候補を含むと66.3歳、政治局員の平均党員歴47.2年、候補を含めると46.2年。  
政治局員就任年は、ホーネッカー（1950）、ジンダーマン（1963）、シュトーフ（1950）など。Gerd Meyer, a. a. O., S. 152f, 168 und 175.

12) スターリニズムとは「階層的に組織された官僚制による支配」で、その「社会的・政治的システムの核心は共産党の一党支配である。党内民主主義の完全な排除の下で、社会的、政治的な決定権力はもっぱら、階層的に構造化された党の頂点に立つ人間の手に握られた」。「共産党は絶対性という要求をもった包括的な、独裁的な支配を行うヘゲモニー政党であった」。H. ヴェーバー、斎藤哲・星乃治彦訳『ドイツ民主共和国史』日本評論社、1991年、4ページから6ページ参照。



## 下部組織反乱の序曲

第2段階の革命は、下部の反乱による党の指導体制の崩壊である。クレンツと新指導部の意図は、ペレストロイカを支持する改革路線を採ることで市民や党員の不満を解消し、党と国家を安定させることだった。しかし、一般市民や下部の民主化への要求は指導部が把握できる範囲をすでに超えたところにあったのである。

SEDでは、1989年に入って党内の様々なレベルで党の路線に対する批判が盛んになっていた。しかし、当初はまだ除名という指導部の措置が反対派の組織化を回避するために有効性を発揮していたのである。ところが除名の数は次第に増加し、1月から11月までの間に6万人にも達しており<sup>13)</sup>、このことは指導部内外を刺激したと考えられる。秋には一般市民が国家に背を向けて国外脱出に走ったと同様、国家と党を見限って多くの党員が離れていったが<sup>14)</sup>、これまでSEDからの離党は党から除名される場合以外は事実上予定されていなかったため<sup>15)</sup>、この離党の第一波は一般市民の蜂起に推進力を得た下部の反乱の序曲であったと見なすことができる。そうして、10月の終わり頃になってドレスデンの10万人デモを一例として、民主化を求めるデモや大規模な政治集会で、一般市民や反体制派市民運動と並んでSED党員の姿が見られるようになったのである<sup>16)</sup>。

こうして、下部組織が蜂起したのは11月になり各地でのデモが最高潮に達してからであった。DDRでは9月10日に史上初の市民運動（新フォーラム）が結成され、25日には大衆のライブチヒ月曜デモ<sup>17)</sup>が街頭に繰り出していたので、下部の始動はかなり遅れたといえる。下部の行動の開始がこのように遅れた原因としては、第1に40年におよぶSED支配体制が挙げられる。SEDは民主集中制を組織原則としていたが、この原則の下では上部組織の決定が下部組織を拘束し、自由な意見の表明は許されなかった。また党員の権利は著しく制限され、代わりに多くの義務が課せられおり、それが党員の行動様式を規定していたのである。また、指導部が言うところの「社会主義的・倫理的規範」を遵守しなければ処罰が科せられた<sup>18)</sup>。つまり、下部党員は上部からの命令に従うことのみ許されており、不満を持つ

13) Vgl. Manfred Uschner, *Die zweite Etage. Funktionsweise eines Machtapparates*, Berlin 1993, S. 15.

14) 1989年春から秋にかけて約4万人が離党した。

Dietmar Wittich, Mitglieder und Wähler der PDS, in: *Die PDS. Empirische Befunde & kontroverse Analysen*. Hrsg. Michael Brie/Martin Herzig/Thomas Koch, Köln 1995, S. 58. さらに10月半ばから11月半ばにかけて約60万人が離党した。Bortfeld, a. a. O., S. 21. 党員数の推移は次のとおり。Patrick Moreau/Viola Neu, a. a. O., S. 14.

|       |     |          |       |    |        |     |         |
|-------|-----|----------|-------|----|--------|-----|---------|
| 1989年 | 10月 | 230万     | 1990年 | 2月 | 65-70万 | 6月  | 35万0491 |
|       | 12月 | 146万3762 |       | 5月 | 45万    | 12月 | 28万4000 |

15) 離党するためには除名を促すような挑発行動に出る以外方法は無く、除名後は長期に渡ってあらゆる差別待遇に甘んじなければならなかった。

Karl Wilhelm Fricke, Programm und Statut der SED vom 22. Mai 1976, Köln 1982, S. 38.

16) Vgl. Bahrmann/Links, a. a. O., S. 54.

17) ライブチヒのニコライ教会には、80年に入ってから反体制的な人々が月曜ごとに集うようになった。9月25日以降、月曜ごとにデモが行われ10月9日には7万人、30日には20万人以上の人々が参加した。

18) Vgl. Karl Wilhelm Fricke, a. a. O., S. 37f.

たとしても、党のメカニズムにあまりにも慣れきってしまっていたため、自律的に思考し、行動し始めるためには時間を要したのである。このような党構造の中で下部が指導部に恐れを抱いていたということも否定できない。下部は命令という形でのみ指導部との接点を持ち得たのであり、一般党员にとって党の頂点は計り知れぬ存在であったといえる。

第2の原因として、党組織があまりにも巨大であったことが挙げられる。SED党员は1989年には230万人にも昇っており、散在する党内の反対派が相互に相手を同志として見出すことは極めて困難であった。民主集中制の原則においては上から下への命令の伝達は確実であったが、横の繋がり、水平方向での情報の流れは極めて悪かった。これは党内の批判的ポテンシャルの結合を阻止することに力を注いできた指導部の政策の成果でもあるといえる。さらにシュタージの存在が党员を用心深くさせていたということも原因の一つとして数えられる<sup>19)</sup>。

#### 下部蜂起とクレンツ50日体制

11月4日の50万人デモは、SED権力の衰退がもはや阻止しえない段階にあることを示した重要な契機であるといえる。これは「下から」組織されたものとしては、DDR史上初めて認可されたデモであり、参加者は人民警察の保護を受けてデモを遂行した。1ヶ月前にはデモはまだ暴力で制されていたことを考えれば、状況がいかに変化したかが明白である。このデモに続いて行われた集会はテレビで生放送され、言論、出版および、集会の自由への要求とともに、DDRにおける民主化の訪れが全国に向けて発信された。29人の弁士が演壇に立ったが、市民の当局への恐れはもはや見られず、政治局員シャボウスキの声は野次と口笛で掻き消され中断されなければならないほどであった。党が市民の権利を蹂躪し、反対派を抑圧した時代はもはや過去のことになったのである。集会では他に弁護士のギジをはじめ、ヴォルフ、ビスキーといった、後にPDS創設の中心人物となる面々が弁士として立った。ギジは「党も変わらなければならない。非常時には非常時の措置が必要なのだ」として臨時党会議招集を提案した<sup>20)</sup>。

8日から10日にかけて招集された第10回中央委員会総会中に始まった下部の蜂起は、2つの重要な局面を呈した。第1の局面は、指導部に対して下部が直接の意思表示を行ったということである。各地での下部による抵抗が明らかになってはいたが、今回のように総会開催中の党本部前で1万人もの党员が結集し、指導部に直接不満や要求をぶつけるということは

19) Vgl. Thomas Falkner, Die letzten Tage der SED, Gedanken eines Beteiligten, in: *Deutschland Archiv* 11/1990, S.1757.

20) Heute vor 5 Jahren. Übertragung der großen Demonstration auf dem Alex am 4.11.89 durch das DDR-Fernsehen. 弁士のスピーチの詳細が『ノイエス・ドイチュラント』紙に掲載されたが、ギジのこの言葉は掲載の対象とならなかった。 *Neues Deutschland*, 6. November 1989, S.1.

表1 1989年秋-1990年党内革命関連年表

| 年月日         | SED   | DDR  | DDR以外   |
|-------------|---|--|---|
| 1989. 9. 10 |   | ノイエス・フォーラム (NF) 結成。                        |   |
| 9. 11       |   | 出国の波高まる。                                   | ハンガリーがDDR市民に西部国境を開放。                          |
| 9. 19       |   | NF, 結社としての認可申請。                            |   |
| 9. 21       |   | 内務省は「国家敵対的」としてNFの申請却下。                     |   |
| 9. 25       |   | ライプチヒ月曜デモ街頭へ。                              |   |
| 10. 7       |   | DDR建国40周年式典。                               |   |
| 10. 9       |   | ライプチヒで改革要求7万人デモ。                           |   |
| 10. 18      | ホーネッカー書記長解任, 後任にクレンツ就任  |  |   |
| 10. 26      |   | ドレスデン10万人デモ。                               |   |
| 11. 4       |   | ベルリンで50万人デモ。                               |   |
| 11. 6       |   | 政府, 新旅行法案発表。                               |   |
| 11. 7       |   | 人民議会, 新旅行法案否決。<br>内閣総辞職。                   |   |
| 11. 8       | 第10回中央委員会 (ZK) 総会開<br>会, 10日まで。政治局総辞職, 再<br>選出。ZK, 次期首相にモドロウ<br>推薦を決定。会場前に1万人の党<br>員結集。12月15-17日に党会議開<br>催決定。 | DDR全土で大規模デモ。                               |   |
| 11. 9       |   | ベルリンの壁開放。                                  |   |
| 11. 10      | 党刷新のための行動綱領決定。ル<br>ストガルトンで15万人など各地で<br>党員集会。  |  | コール, 元首相ブランド西ベル<br>リン市長モンパーが西ベル<br>リン政治集会に参加。 |
| 11. 12      | 政治局, ZKへの臨時党大会提案<br>を決定。  | 約100万人がBRDを訪れる。                            |   |
| 11. 13      | 第11回ZK総会。党会議を臨時党<br>大会に格上げ決定。   | モドロウ首相就任。                                  |   |
| 11. 17      |   | 既成5党による連立内閣発足。                             |   |
| 11. 28      |   | ライプチヒで20万人デモ。<br>政府はギジの提案に基づく新旅行法案<br>を発表。 | コール, 連邦議会にドイツ統<br>一への「10項目」提案発表。              |
| 11. 30      | プラットフォームWF設立  |  |   |
| 12. 1       |   | 人民議会, 憲法第1条からSEDの<br>「指導的役割」削除。            |   |
| 12. 2       | 政治局退陣表明。  |  | マルタで米ソ首脳会談。                                   |
| 12. 3       | 作業委員会発足。  |  |   |
| 12. 7       |   | 第1回円卓会議招集。自由選挙実施決<br>定。                    |   |
| 12. 8       | 臨時党大会開幕 (8./9. および<br>16./17.)。   | シュトーフ元首相ら逮捕。                               | EC首脳会議開幕。                                     |
| 12. 9       | ギジを党首に選出。   |  |   |
| 12. 16      | 党名をSED-PDSに改称。  |  |   |
| 12. 22      |   | ブランデンブルク門開放。                               | ルーマニア, チャウシャスク<br>政権崩壊。                       |
| 1990. 1. 9  |   | デモ再開。統一への希望を訴えるデモ<br>に変化。                  |   |
| 1. 21       | ベルクホーファーら40名離党。ク<br>レンツら旧幹部除名。  |  |   |
| 1. 28       |   | 人民議会選挙を当初の予定5.6から3.1<br>8に繰り上げることを決定。      |   |
| 2. 4        | 党幹部会, 党名をPDSに変更す<br>ることを決定。   |  |   |
| 2. 24-25    | PDS第1回 (選挙) 党大会。  |  |   |

これまで無かったことである。下部はこの場で、市民の動きに対して適宜に対処できず常に後ろ手に回っている指導部の無能さを糾弾し、党のラジカルな刷新を公然と求めたのである。第2に、この第10回中央委総会は、指導部が下部の前に譲歩を強いられ、それに屈服した重要な契機でもあるといえる。総会は新政治局メンバーとして改革派のモドロウを選出し、12月15日から17日の日程で党会議を開催することを決定したが、この間、党本部前で起ったシュプレヒコールによって総会が何度も中断させられ、政治局員が下部をなだめるために現れるというような一幕さえあった。このような状況の下で、これまで行われていたような、上からの提案に拍手をもって満場一致で同意するというような方法がもはや通用するはずはなかった。政治局は党会議開催の決定にしても、下部の抗議によって3日後には撤回し、代わりに臨時党大会を提案せざるを得なくなったのである。

この集会では「党員の戦線」、「上から下への司令体制の終焉」、「党の指導体制は下から崩壊」といった言葉が飛び交ったが、これらからはこれまでの指導体制の拒否、指導部への不信任の意志が読み取れる。なかでも注目値するスローガンは、「我々も人民だ」<sup>21)</sup>および「我々が党だ」というものである。DDR市民はデモにおいて「我々が人民だ」と叫び、これまで党が人民の名においてすべてを支配してきたことに対して抵抗した。この頃、クレンツ政権は改革政策の一端として市民との対話政策を実施するのであるが、下部党员達は自らが対話から除外されたままの人民であることを悟り、「我々も人民だ」というスローガンをを用いたのである。これは下部の覚醒を表わすものとして重要である。また、党员達は「我々が党だ」と訴えることで、指導部が党の名においてすべてを支配してきたことに対して、党の主体は自らであることを主張した。下部はいよいよ党の実権を要求し始めたといえる。

さらに、総会開催中、各地で党员集会が開催されロストック県で2万人規模の決起集会が行われた他、ドレスデンでは数千人の党员が集まり、SED県および郡指導部の退陣を要求した。そしてこれまでの上からの決定に下部が従うという指導原則の崩壊は、各地の指導部が「下から」解任されることで進行していったのである。上からの提案で就任していたこれまでの第1書記が次々と任務を解かれた直後<sup>22)</sup>、エアフルト、カール・マルクス・シュタット、ハレ、マールブルク、ロストックの各県では、党员の退陣要求に屈した第1書記に代わる新しい第1書記が政治局の同意を得ることなく民主的に選出された<sup>23)</sup>。また人民議会第11回大会は、ハンス・モドロウに新内閣の組閣を委ねたが、これは国民と党员の信頼を取り

21) Thomas Falkner, a.a.O., S.1758.

22) *Neues Deutschland*, 10.November 1989, S.2.

16日までですべての県第1書記が下部の圧力によって解任された。Vgl. Bahrmann/Links, a.a.O., S.108.

23) 13日にコッブス、14日にノイブランデンブルク、ベルリン、15日にポツダム、ドレスデン、フランクフルト各県で新しい第1書記が選出された。

Vgl. Edwin Schwertner, Zur Bildung des SED-Arbeitsausschusses, in: *Die PDS*, a.a.O., S.160. *Neues Deutschland*, 13.November 1989, S.2.

戻そうとするクレンツ指導部が最後の切り札を出したことを意味したと同時に、党からの閣僚評議会（内閣）の自立をも意味した。

指導部の支配能力が形骸化した証として「分派」形成が挙げられる。この頃はまだSED党規約が有効であった。すなわち、「党員は（…）重要でない少数派の意志を党の多数派に押し付けたり、あるいは分派の形成によって党の統一を破壊したり、分裂を企てたりしないという義務を負（3条32項）」っていたのである。しかし、29日に党監査委員会によって、過去に分派活動を理由に除名されていたハーヴェマンやヘルンシュタットの名誉回復が行われた。そして翌30日には「プラットフォームWF」がベルリン・オーバーシェーンヴァイデにおいて創立式典を催したのである<sup>24)</sup>。これはDDRラジオ局とベルリン・テレビエレクトロニクス工場が結びついて結成されたもので、SED構造が党内反対派の水平の結びつきを阻止する能力を全く失ったことを明らかにした。このプラットフォームは設立声明において「我々は党指導部とそれを支える機構を信頼することをやめ、現政府を倒す。党の救済は党の新設に匹敵する妥協のない刷新にある」と明言したのである。

翌日12月1日の人民議会第13回大会は、憲法第1条からSEDの国家支配を保障していた「党の指導的役割」の部分削除の決定を下す。このことは党が支配の道具としての下部に続いて、国家も失ったことを意味した。政治局は3日にDDR史上最後の総会となる中央委臨時総会を招集したが、そこでは政治局員の汚職や腐敗、犯罪的行為に対する批判が集中し、結局総辞職に追い込まれた。夕刻、中央委は「党のラジカルな刷新のプロセスが下部から」指導部を追い越して先に進められていることを認め、政治局は現指導部の能力に対する「大部分の党員による批判を受け入れる」と事実上の敗北宣言を行ったのである<sup>25)</sup>。これをもって党の上からの崩壊は完結したといえる。

#### 作業委員会設置

政治局が退陣声明を発表したのが12月3日の夕刻であるが、翌日4日の『ノイエス・ドイチュラント』紙は、これと並んで暫定的指導部となる作業委員会設置を報じた。「作業委員会は、近代的社会主義政党を下から再編成することを可能にするための臨時党大会の準備をその任務とする」<sup>26)</sup>という記事の真下に、中央委と政治局総辞職が報じられたが、それは下部の勝利宣言と指導部の敗北宣言が同時に発表されたかのようなようであった。

中央委と政治局の退陣および作業委員会設置が決定したのは3日の午後1時から3時にかけて開催された中央委総会においてである。そして午後4時には25名の作業委第1回会議が

24) WFはWerk für Fernsehelektronik.

25) *Neues Deutschland*, 4. Dezember 1989, S.1.

26) Ebenda.

招集された。いかにしてこのような迅速な交代劇が可能になったのか。実はこの日の午前中、新しい県第一書記達と政治局の間で会合がもたれたのである。第一書記は事態を把握できない指導部の無能さに対する党員の怒りを伝え、政治局の辞任を要求した。この時初めて、臨時党大会準備のために「作業委員会」を暫定的指導部として組織することも提案されたのである<sup>27)</sup>。すなわち、第一書記と政治局の会合は遅くとも午後1時の中央委総会までには終わっていたはずであるから、それから午後4時の作業委員会第1回会議までの間に人が集められたということになる。この時期、首相として影響力を行使できたであろうモドロウと指導部退陣を要求した各県第一書記達が人選に中心的役割を果たしたことは間違いない<sup>28)</sup>。以後、同委員会は、フンボルト大学の研究者やプラットフォームWFの協力を得て、新しい党規約の草案を作成するなど、新しい方向付けの輪郭を作る作業を進めていったが、まさにこの過程がPDSの基礎となったのである<sup>29)</sup>。臨時党大会は、切迫した状況に鑑みて予定を繰り上げて12月8日および9日に第1部を、16日と17日に第2部として行われることになった。

### 臨時党大会

この臨時党大会を目前にした頃から、将来の指導部と一般党員の新しい関係の基礎が築かれつつあったといえる。作業委員会は改革派によって構成されるとはいえ、その成立の経過が不透明であるとして正統性を問う声が党内で相次いだ。つまり、下部は徹底した「下から」の党の形成のみを受け入れる用意を示していたということになる。そして、下部の結集の場となった臨時党大会には各地で民主的に選出された<sup>30)</sup>2750人の代表者が集まり、倒壊寸前のSEDがいかなる政党に転換し、再生するかを下部自らが決定する場となったのである。

議論の中心となるべきテーマは「スターリン主義、つまり管理主義的中央集権的な社会主義の基本構造との決別」と「党の今後の役割、進むべき道」<sup>31)</sup>であった。具体的には、①解党問題、②組織的・人事的刷新、③党の名称の変更、④新規約の採択・綱領的刷新、の4つが争点となった。

まず議論の末、解党は見送られた。これはDDRという国家の存続を前提としていたためである。首相モドロウはDDRという国家の存続のためには党を破壊すべきではないという

27) Edwin Schwertner, a.a.O., S.160.

28) ギジの場合、3日はある会議に出席していたところ、突然紙片が回ってきた。そこには中央委員会本部に来るようにと書いてあり、行ってみるとモドロウ、ベルクホーファーなど数名のメンバーが座っていた。そこでギジは中央委員会も政治局もすでに存在しないことを告げられたと同時に、暫定的指導部である作業委員会への参加を求められたという。Gysi/Falkner, a.a.O., S.73.

29) Edwin Schwertner, a.a.O., S.161.

30) 例えばホイヤースベルグでは臨時党大会に送り出す郡の代表者を決めるために500人以上の党員があつまり数時間に渡る議論が続いた。これまでは提案される候補者に拍手で答えるだけだったため数十分で終わっていたという。Neues Deutschland, 27.Dezember 1998, S.2.

31) Vgl. Dokumentation. Der Außerordentliche Parteitag der SED im Dezember 1989, in: Deutschland-Archiv, 11/90, S.289-292.

ことを訴えた。ギジは解党が党员から政治的故郷を奪うこと、解党によって生じる政治的真空状態が国家の危機を深め、さらに巨大な党機構の全職員が失業すること、また党の財産は所有者を失うため、引き続き設立されるであろう多数の党がその継承権をめぐる衝突をひき起こすだろうということなどを挙げ、「党の解体や分裂は極めて無責任な決定であり、問題外」であるとした<sup>32)</sup>。

党首には41歳の弁護士ギジが、副党首にモドロウとベルクホーファーそしてポールが選出された。約2000名の職員を擁した中央委機構は解消され、中央委員会に代わって101名から成る執行委員会が設置された。執行委員会は第1回会議で政治局に代わる幹部会を任命し10名が選出された。党の名称は議論が二分したこともあり、新しい政党法を待って再度議論に付すということで暫定的にSED-PDSと改称され、民主集中制の廃止、党内民主主義の保障と実践、基礎組織の権利拡大といった民主的党構造に方向付けた規約が採択された。

この臨時党大会の最大の成果は、党が底辺民主主義的、多元主義的社会主义政党への道を見出したことである。この点において党は、全く新しい性質の党に生まれ変わったといっても過言ではない。規約は「同権の構成員の自発的な結合であり、党の主権はこれらの党员にあり」、党内生活における「意見の多様性、行動の統一、民主的投票と統制、開放性」を強調する。今や「党と党生活における意志形成の決定的な基盤は党の底辺組織」であり「選出された上位のすべての指導層は、その活動において多数の意志に従うことを義務とする」のである。党は、民主集中制やイデオロギーの押し付けや操作によってではなく、「すべての党员、プラットフォームおよび党内の諸潮流が競い合う中から統一性を獲得する」<sup>33)</sup>、つまり党派の多元性に党の本質を見出すということになったのである。規約にはさらに「フォーラム、活動共同体、利益共同体、プラットフォームの形成」の権利なども盛り込まれた結果、新規規約が採択された臨時党大会の直後には様々なプラットフォームが形成された。それらは共産主義プラットフォーム(1989年12月30日設立)、社会民主主義プラットフォーム(1990.1.9)、プラットフォーム「第3の道」(同)、プラットフォーム「民主的社会主义」(90.1.17)などである<sup>34)</sup>。

ただし、「多元主義的社会主义政党」への道以外に党が生き延びる道は無かった。下部はSED体制に反対、SEDとは違う民主的な社会主义を目指すということでは一致していたが、その対案として彼らが抱いていた党のイメージは極めて多様であった。それは、後のプラットフォームの設立、臨時党大会の準備段階での議論や様々な報告からも読み取れることであ

32) Vgl. Ebenda., S. 297-299.

33) *Neues Deutschland*, 11. Dezember 1989, S. 3.

34) さらに10月にプラットフォーム「急進的左翼」、91年6月にトロツキ主義プラットフォームなど。Vgl. Moreau, a. a. O., S. 384-398. プラットフォームは党自身の方向の変化によって解散・再編されるが、PDSは現在(1999.1)エコロジー・プラットフォームと共産主義プラットフォームの他、マルクス主義フォーラム、24の作業共同体、1つの利益共同体を擁する。

る。例えば、将来の党について労働者階級の前衛として「ドイツ社会主義民主労働者党」や「就労人民社会主義党」と名乗るという提案もあった<sup>35)</sup>。また、臨時党大会の数日前にドイツ共産党を再建しようというグループが形成されたが、ギジが臨時党大会中にこのグループに対して、党を分裂させないためにプラットフォームとして留まるよう説得したという証言もある<sup>36)</sup>。これが後の「共産主義プラットフォーム」であることは言うまでもない。「改革社会主義者」が主張する「民主的社会主義」はこのような反SED体制の下に結集した多様な下部の上に「看板」として掲げられた訳である。

しかし、SED-PDSはその党名が体现しているように「妥協の産物」でもあった。もとの指導部を失った官僚機構が指導者を欠いたまま存続し続けるという問題の他、解党しなかったために、保守的党员とも決別することができなかった。その結果、党のSED色が払拭できないだけでなく、改革プロセスを遅らせるということになったのである。これに対して党员の間で再び解党への要求が高まる。執行委員会は刷新の加速を進める措置として党機構のさらなる縮小、信用を失った党员の早急な排除、旧党章の廃止、国家保安庁の解体などを決定し、解党拒否決議案も可決された。ところが21日にはギジ、モドロウとともに党の指揮の中枢を担っていたベルクホーファーが離党をもって解党を要求したのである。彼の離党は党内を深く動揺させ、離党の波を引き起こした。

しかし一方では多くの党员が新しい党建設に積極的に関与し<sup>37)</sup>、解党は再び回避された。2月4日に招集された執行委員会では、党の新しい状態を表わすためにPDSという新しい名称を名乗ることが決定した。「我々の党はもはやSEDではない。構造や我々自身の刷新の複雑なプロセスは継続されなければならないが、過去との決別、民主的イニシアティブと諸目標が我々を新しい党にしたのである」<sup>38)</sup>。この頃には党员数は65万-70万に減少していたが減少傾向は落ち着いていた。2月24日と25日にはPDS第1回党大会が開催され、3月18日に予定された人民議会選挙に向けて新たな諸戦略が明らかされ、党綱領と選挙綱領、および新規約などが採択された。

#### 4 新指導部メンバーの変遷

##### 作業委員会の構成メンバー

25名から成る作業委員会のメンバーは、クローカーを含む10名の県第一書記と、党の改革過程において頭角を現した者で構成され、メンバーのすべてがモドロウ、ヴォルフをとりま

35) Manfred Behrend/Helmut Meier (Hrsg.), *Der schwere Weg der Erneuerung*, Berlin 1991, S.222.

36) Christian v. Dittfurth, *Ostalgie oder linke Alternative. Meine Reise durch die PDS*, 1998 Köln, S.37.

37) Vgl. Bordfeldt, a.a.O., 1990, S.30.

38) Manfred Behrend/Helmut Meier (Hrsg.), a.a.O., S.349.



く改革派諸グループで構成されていた<sup>39)</sup>。女性は4名で、メンバーの中には11月4日のDDR史上最大のベルリン50万人デモでの弁士ギジ、ビスキー、ヴォルフが含まれている。メンバー中、旧指導部の息がかかっていると考えられる者は、中央委青少年担当部長で人民議会青少年委員会委員長であり「クレンツの養子」とも呼ばれたシュルツとシュヴェーリン県第二書記で中央委員会メンバーポストラ、さらにシャボウスキの後任としてSEDベルリン県指導部第一書記の地位を得たアルブレヒト3人であると考えられる<sup>40)</sup>。

個々のメンバーについて検証してみると<sup>41)</sup>、有力なメンバーは以下の10名である。

表2 作業委員会主要メンバーの作業委設置時の年齢と職業

| 氏名               | 年齢 | 職業                       |
|------------------|----|--------------------------|
| H. クローカー         | 60 | エアフルト県第一書記               |
| K. ヘプケ           | 56 | 副文化大臣                    |
| W. ポール           | 49 | マーグデブルク県第一書記             |
| W. ベルクホフファー      | 46 | ドレスデン市長                  |
| G. ギジ            | 41 | 弁護士                      |
| M. ヴォルフ          | 66 | 作家、元国家保安省副大臣             |
| L. ビスキー          | 48 | ポツダム・パーベルスベルク映画及びテレビ大学学長 |
| G. シュルツ          | 42 | 中央委、人民議会青少年委員長           |
| B. ツィンマーマン (女性)  | 50 | 『ヴォッヘンポスト』誌編集局長          |
| D. フュルゼンベルク (女性) | 49 | 技術委員会総裁                  |

作業委員会の成立をもって、党エリートの時代が終わり「アウトサイダーの時代」に移ったという指摘があるが<sup>42)</sup>、実際「アウトサイダー」と呼べるのはギジ、ヘプケ、クロカーの3名である。党首となるギジは弁護士であり、とりわけ著名な体制批判者の弁護を担当して知名度を上げた。1989年には政府の新旅行法に対して対立案を提出し、当時憲法違反であった市民運動「新フォーラム」の合法化を要求したのも彼である。ヘプケはFDJ (自由ドイツ青年団) の中央評議会事務局メンバーを経て、党機関紙『ノイエス・ドイチュラント』紙の編集局員、73年からは副文化大臣に就任していたが、85年に反体制派の作家フォルカー・ブラウンの小説に印刷許可を与えたことで懲戒処分となり、さらに89年には作家団体によるチェコのヴァツラフ・ハベル釈放のための決議を支持したことで再び処罰を受けている。クロカーはコンビナートの総支配人で、人民議会議員でもあったが、83年に政治局員ミッタークとの意見の相違から職務を解かれ、89年11月の民主的な選出方法によりエアフルト第1

39) Patrick Moreau, a. a. O., S. 20. また様々な党員の証言からも明らかである。

40) Vgl. Manfred Gerner, a. a. O., S. 157.

41) 著名人ビオグラフィー辞典を用いて、掲載されているか否かで影響力を判断する Gerner の手法を用いる。その際 Jochen Czerny (Hrsg.), Wer war wer. を判断材料とする。この辞典は、一定の基準を満たした人物についてのみデータが掲載されている。DDRの著名人のショート・ビオグラフィーを集めたもので、地位、影響力、人気度、業績などを選抜基準としている。

42) Manfred Gerner, a. a. O., S. 158.

書記に復帰するまで、政治的には左遷状態であった。

ビスキーやツインマーマンは学問分野で活躍しており、89年の変革期以前には、政治的にはほとんど表舞台に登場することは無かった。総合してみると、暫定的指導部である作業委員会は「アウトサイダー」的色彩を帯びた改革派と「改革社会主義者」である「第3世代」改革派の集まりであったといえる。前指導部のメンバーの影響力で作業委入りしたと思われる3名は、下部の圧力で開催に至った臨時党大会では影響力を行使する余地はほとんど無かったと考えられる。

### SED-PDSの指導部

臨時党大会の第1日目に選出された新たな指導部は101名からなる執行部メンバー中、旧中央委員はモドロウを含む4名のみで、15名の県第一書記の内10名が執行委員会入りした。260名以上を数えた郡第一書記からはわずか3名のみが選ばれ、他は下部組織の代表者達で女性16名であった。執行部メンバーの職業は多様で、職人から長距離運転手、大学助手、医師まで様々であったが、一般労働者の数は10名余りで、大学教育を受けたいわゆるアカデミカーと呼ばれる人々が全体の75%を占める<sup>43)</sup>。このような特徴からも、新しい執行部が上からの操作による人選で構成されたものではないということは明らかである。

党の実際の指揮に当たる常任幹部会のメンバーは10名で、内女性は2名であった。重要人

表3 SED-PDSの指導部主要メンバーの臨時党大会時の年齢と職業、就任役職

| 氏名             | 年齢 | 職業                       | 役職                        |
|----------------|----|--------------------------|---------------------------|
| G. キジ*         | 41 | 弁護士                      | 党首                        |
| H. モドロウ        | 61 | 閣僚評議会議長(首相)              | 副党首                       |
| W. ベルクホーファー*   | 46 | ドレスデン市長                  | 副党首                       |
| W. ポール*        | 49 | マーグデブルク県第一書記             | 副党首                       |
| L. ビスキー*       | 48 | ポツダム・バーベルスベルク映画及びテレビ大学学長 | 党執行委員会教育政策・学校政策およびマスコミ委員長 |
| K. ヘプケ*        | 56 | 副文化大臣                    | 党執行委員会科学および文化政策委員長        |
| H. J. ヴィラーディング | 37 | 政治局員候補および書記局員候補          | 党執行委員会国際政策委員長             |
| H. ヘーゲヴァルト     | 53 | ドレスデン工科大教授               | 党執行委員会環境政策委員長             |
| M. デネケ(女性)     | 36 | マーグデブルク国営商業機関党組織書記       | 党執行委員会女性および青少年政策委員長       |

\*元作業委員

43) Vgl. Materialien, a.a.O., S.153-158. 101名の執行部メンバーのうち博士の学位を有する者31名、うち教授資格取得者4名。

物と見なされるのは以下の9名である。

首相であるモドロウを最年長、デネケを最年少とするメンバーの平均年齢は47歳でありホーネッカー期の67,2歳、クレンツ期の59,2歳と比較するとその若年化が特徴的であり、世代の面でも完全な交代が行われたといえる。黨員歴はモドロウの40年を最長として、平均約26年でメンバー全員が比較的早期に入党している。また、メンバー全員がFDJ経由でSEDに入党している。FDJは党綱領によると「党の積極的な協力者であり闘争予備軍」、つまり「党の後継者養成機関」であった。従って、「個人的出世の機会を得るためにはほとんど必ず加入しなければならなかった」<sup>44)</sup>訳である。

メンバーの経歴を個々に見ていくと、とりわけモドロウは年代的にFDJの幹部を経てモスクワおよび党学校で高等教育を受け学位を得るといった典型的な高級幹部コースを辿ったが、改革志向であったため政治局入りが阻まれ、73年以来ドレスデン県第一書記であった。しかし89年11月に改革派ゆえに政治局入りし閣僚評議会議長（首相）に選出されたことは先に述べたとおりである。ベルクホーファーは86年からドレスデン市長で、やはり改革派として知られていた。90年1月に結成された社会民主主義プラットフォームはSED-PDSのプラットフォームの中で最も西の社民に近く、O.ラフォンテーヌの綱領的ヴィジョンを基本としていた。このプラットフォームはベルクホーファーを中心とするライブチヒ・カールマルクス大学のグループであった。

デネケは経済分野での専門教育を受け、ポールは法律家としての教育を受けた。ヴィラーディングはFDJ幹部を経て中央委員会政治局および書記局候補にまで昇進していた。このようなメンバーの経歴から明らかになるのは、新指導部がSEDの若手基幹黨員を中心としているということである。また、モドロウやベルクホーファーといった89年の変革期以前から改革派として知られていたベテランと、若手で政治的経験豊かなデネケ、ポール、ヴィラーディングのグループ、ビスキー、ヘーゲヴァルトといった学問分野で頭角を現したいいわゆる典型的な「第3世代」の改革派、「アウトサイダー」のギジ、ヘプケといった3つのグループから構成される。

#### PDSの指導部

1990年2月24-25日に招集された第1回党大会では党首をギジ、名誉党首をモドロウとして、新しい執行委員会100名と幹部会10名が選出された。執行委員会委員の内60名は前回からのメンバーで、幹部会にはマイヤーと、経済学教授で数々の肩書きをもつシュタイニッツが加わった。中心的存在であったベルクホーファーの穴を埋めたのは執行委員会選挙事務所所長に就任したアンドレ・ブリーであり、以後PDSの理論的指導者としてギジ、モドロウ、

44) H. Weber, a. a. O., S. 155.

ポールらと党の中核を担うことになる。プリーは、87年から兄のミヒャエルとともにベルリン・フンボルト大学社会主義理論研究プロジェクトのメンバーで、「第3世代」言説の牽引役であった人物である。

以上のことから、PDS指導部の中核はSEDの次世代を担うべきであった若手の改革派基幹党员によって形成されていることがわかる。また彼らは政治的経験豊かな実務派と「第3世代」言説の中核を担った理論派から成る。そして、それを執行委員会として支えるのは1989年秋に決起したSED下部党员の代表者達である。

## 5 結びにかえて

アレンスバッハが1995年12月に行った世論調査に「だれかが、PDSをSEDの誤り、あるいはDDRの誤り一般について非難してはならない、PDSにはもはやそれに対する責任は無いと言った場合同意しますか」という質問が見られた。これに対して西では「同意する」と答えたのが22%、「同意しない」と答えたのが51%、東ではそれぞれ47%と32%であった<sup>45)</sup>。この違いがどこから出てくるのかということが問題である。東はともかく、反共宣伝は行き渡っていても東の新聞さえ流通していない西で、人々が上記のような判断をする基準は何なのか。

PDSは本稿で扱った転換過程で、組織面および人的側面についてはSEDと「断絶」したといえる。1989年末の一月にも満たない期間、12月3日の指導部による事実上の敗北宣言をもって終結した党员革命については、これまでほとんど注目されて来なかったがPDSの本質を知るためには本来見過ごされてはならない部分である。また、この党内闘争から臨時党大会を経てPDSの成立に至るまでの議論や経過は、DDRでは『ノイエス・ドイチュラント』紙上で連日報道されていたということを指摘しておく必要がある。同紙は当時、DDRで最も多く読まれていた全国紙である<sup>46)</sup>。確かに同紙は当時党機関紙であり、客観性に欠けた報道や明らかに粉飾された記事が入り混じってはいた。しかし、市民は長年の経験からこの新聞の読み方を心得ていたはずであるから、記事の信憑性についてはその都度判断していただろう。革命過程における同紙の報道姿勢の変化もまたあまりにも明らかである。また『ノイエス・ドイチュラント』紙に留まらず、マスコミ一般で、少なくとも指導部と下部の対立については連日取り上げられていた<sup>47)</sup>。さらに、10月以降各地で起った大規模なスト

45) *Allensbacher Jahrbuch der Demoskopie 1993-1997*, München 1997, S.884.

46) 『ノイエス・ドイチュラント (Neues Deutschland)』紙はDDR時代には党機関紙であり、1989年には販売部数108万8,726部、うち98万130部が購読されていた(筆者の問い合わせに対するノイエス・ドイチュラント編集部1998年12月21日の回答より)。

47) Bahrman/Links, a.a.O., S.87.

ライキではSED指導部対一般市民・市町当局側の職員・SED党员という対立関係が確認されており、少なくとも一部の一般市民にはその記憶が残っているはずである。

以上のことから、DDRの人々はSED内に何が起ったのか、またPDSがいかに成立したのかということについて多かれ少なかれ知っていたと考えられる。とすると、東の市民の間で独裁政党SEDの流れを汲むPDSがある程度受容されているのは、全く自然なことだと思われる。これに対して、西ではPDSの本質に目を向けること無く、無関心なままで否定的な判定を下しているのである。「内的統一」の欠如の原因について先に指摘されたように、西の人々は東に対してもっと目を開くべきであろう。東とは当然、PDSも含めてということである。

1989年秋の東独革命についての省察の過程では、党内改革派基幹党员と一般党员の関係と、反体制派の市民運動グループと一般市民のそれとの間に共通性が見られた。例えば、反体制派組織ノイエス・フォーラムは市民を炊きつけたり、デモに駆り立てたのでもなく、蜂起を呼びかけたのでもなかったが、「デモをする大衆によって抗議行動の先頭に押し出され、そうして街頭で形成されつつある抵抗の象徴になった」<sup>48)</sup>。また、DDR大衆の抵抗は自発的に突然起こったというところに特徴がある。そしてこのことは、彼らが抱いていた不満がいかに大きかったかを示す<sup>49)</sup>。SEDにおいても、不満を募らせた下部が蜂起したことで党の統制は一瞬にして崩れた。改革派基幹党员達は、この下からの動きに力を得て党の先頭に立ったのである。いずれにしても、DDR大衆のパワーが革命を成功させたといえる。平和革命の主役は、SED党员をも含めたDDR市民だったのである。

PDSの成立は、改革社会主義者達にとっては一つの実験の始まりを意味する。PDSはSED党内反対派が受け継いできた「民主的社会主義」の流れの延長線上に自らを位置付ける。しかし、この民主的社会主義は最初の議論が始まってから実践に移されたことは無かったし、実践される可能性も無かった。民主的社会主義は長い言説の伝統にあって、初めてPDSという形で理論から実践への移行が可能になったのである。

48) Detlef Pollack, Bedingungen der Möglichkeit politischen Protestes in der DDR. Der Volksaufstand von 1953 und die Massendemonstrationen 1989 im Vergleich, in: *Zwischen Verweigerung und Opposition*, Frankfurt/M. 1997, S.311.

49) Ebenda.